

コムギ

(黒ボク土)

〔土壤肥料〕

黒ボク土ではリン酸欠乏により根系の発達や分げつ促進に影響がしやすい。また、団粒構造の十分に発達した土壌でないと良好な発芽が得られない。このため、土壤生産力維持増進のために、堆厩肥などの有機質資材の供給を行う。窒素成分は増収に効果があるが、過剰施肥にならない注意が必要である。カリ成分は生育期間を通して必要であるため元肥として施用する。

〔病虫害・雑草防除〕

無病種子を確保し、塩水選による不良種子の除去、種子消毒等を行い、種子由来の病虫害発生を抑えることが基本となる。赤かび病やうどんこ病の計画的防除を実施し、薬剤散布は、生育初期の防除を中心に行う。生育中・後期の防除は、気象的条件による突発的な病虫害の発生時に留める。除草剤施用を機械除草等に切り替え、一層の化学農薬使用の低減を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
有機質資材 施用技術	土壤診断に基づいた稲わら堆肥あるいは麦稈施用を基本とする。 マメ科の緑肥作物を利用する。	堆肥1～3t/10a
化学肥料 低減技術	表層、播種溝施肥による局所施肥を行う。 肥効調節型肥料を基肥に用いる。 有機質肥料による施肥を行う。	分量で施肥基準以下 有機質肥料併用の場合には化学肥料低減率20～50%
化学農薬 低減技術	温湯種子消毒を行う。 (対象：斑葉病、なまぐさ黒穂病など) 機械除草を行う。 抵抗性品種を利用する。 (対象：縞萎縮病など)	慣行使用回数の20%減
その他の 留意事項	コムギは前作の野菜等の余分な養分の吸収、連作障害の防止、麦稈による有機物の確保等の利点を有している。 窒素過多の場合には倒伏による収量の低下や品質低下、さらには病虫害の多発が予想されるので、土壤肥沃度を考慮した施肥量とする。 緑肥すき込み直後は発芽障害の恐れがあるため、期間を置いて播種等を行う。 土壌が酸性の場合は、pH6.5前後に矯正する。 施用するたい肥などの化学肥料代替率及び肥効パターンなどを十分に考慮し、土壤診断に基づいて化学肥料低減を図る。	